

乙 頁

お と さ だ

第42号 通巻9巻第1号

1989年1月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

☎ 0775-85-4397

〒 524-02

守山市服部町2250番地

はじめに

新しい年を迎え、わたくしたちの祖先が残してくれた文化財の調査に、職員一同、心機一転、努力を続けたいと思います。それと共に、多くの皆さんの御協力をいただき、遺構、遺物の解明に努め、祖先の生活行動の軌跡をさぐりたいと思います。埋蔵文化財の調査は、地下という特別な世界に存在するものなので、発掘に際して細心の注意と技術、そして高い問題意識が要求されますので、みなさんのご支援、御協力をお願い申し上げます。

所 長 勝 見 一 寛

発掘調査の成果

昨年11、12月中に、7ヶ所で新たに調査が始まり、そして以前より実施していた2ヶ所を含めた6ヶ所の遺跡で調査を終了しています。



1 益須寺遺跡の調査

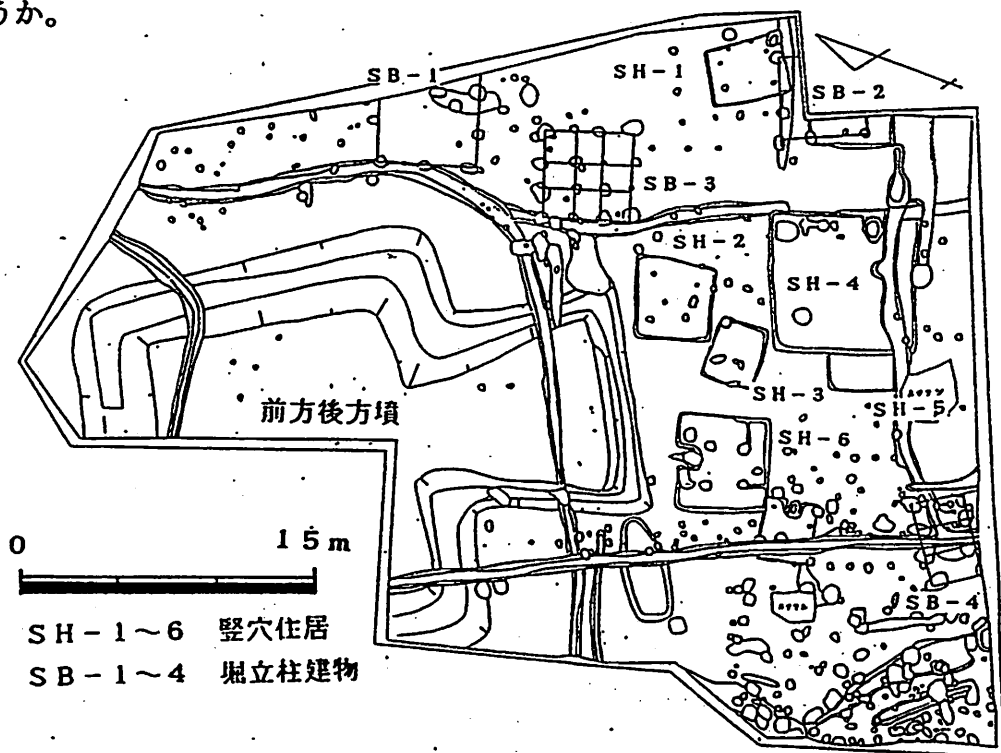
8月から実施してきた益須寺遺跡の調査も12月2日に終了した。この間、新聞やテレビで報道された前方後方墳を発見するなど多大な成果を挙げることができた。以下、その調査成果の概要を簡単に報告する。

3世紀後半頃に築造されたとみられる前方後方墳は全長27.4mの規模で、まわりに幅1～4m、深さ40cm～1mの周溝がめぐる。墳丘の盛土は削られて、すでになくなっていたが、築造当時は高さ1～2mの盛土があったと考えられる。県内では6例目の発見であり、当時の墓制を知るうえで重要な資料となろう。

墓域であったこの地も6世紀頃には集落として開発されたようである。竪穴住居7棟、土壇2基、溝3条がこの時期の遺構である。竪穴住居のうち3棟にはカマドが付設されていた。遺物は多量の土師器、須恵器や滑石製紡錘車・白玉・管玉が出土している。

7世紀後半～8世紀頃の遺構は掘立柱建物4棟以上、竪穴住居1棟、土壇、溝があり、遺物は和同開珎5枚をはじめ、大量の土器や瓦が出土した。この地域は「日本書紀」持統天皇の条に記載されている益須寺の寺域に比定されていて、検出した建物群は益須寺との強い関係が予想される。

平安時代以降の遺構が急速に減少するのは、益須寺の衰退に関係するのであろうか。



遺構平面図

2 杉江東・大宮遺跡の調査

9月中旬より着手した両遺跡の調査は、天候にも恵まれて順調に進み、12月12日で完了した。調査の成果は次のとおりである。

杉江東遺跡では、旧河道を含め5条の溝を検出した。東西方向の旧河道は、浜街道に近い調査区で田面下1.2mより検出した。地山である黒色粘土は南へ行くにしたがって、徐々に高くなっている。この旧河道の埋土は砂質土で、そこから黒色土器、土師器、須恵器が出土している。他の溝は田面より25~70cm程度下で検出した。調査前まで流れていた河川によって壊されている部分が多い。遺物は各溝より少量の土師器が出土するのにとどまった。

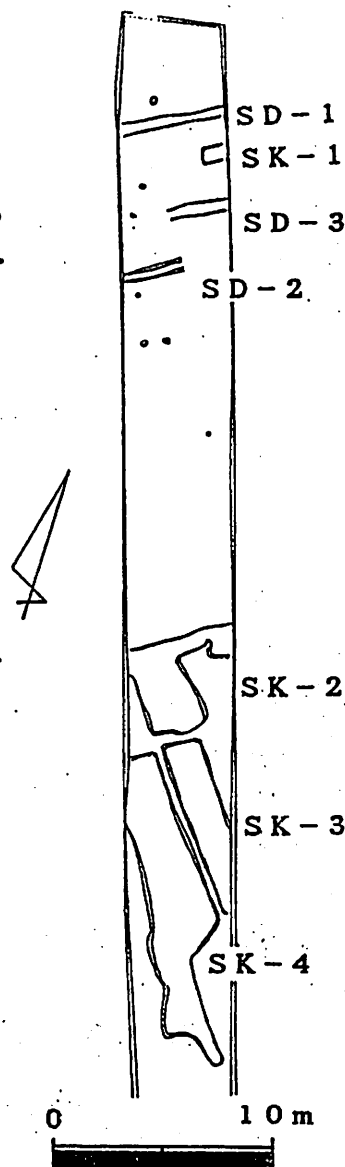
大宮遺跡では田面から20cm下で東西方向の溝3条、ピット8穴、土壇4基を検出した。(図参照)溝は幅50~80cm、深さ約8mを測り、残存状況は良くなかった。SD-3は淡灰茶色粘土、SD-1、2は茶褐色粘土を埋土としていて、SD-1から甕、筒鉢脚部が出土した。古墳時代前期と考えられる。

一方、南半は堆積状況が大きく異なっていた。耕土下1mまでは攪乱されていたが、それ以下では暗灰色粘、砂層、砂利層が堆積し、砂利層からは黒色土器、土師器、須恵器の他、墨書土器1点、2段に重ねられた曲物や多数の木器が出土している。

3 横枕遺跡の調査

吉身町元町交差点から南東へ約150mの地点で、個人住宅建設に先立ち発掘調査を実施した。調査面積は約200㎡で12月13日に開始し、12月17日に終了した。遺構は耕土、床土直下(-20cm)の明黄色シルトの地山で、土壇8基、溝1条、柱穴を検出した。土壇には長径2m、短径1.5mを測る長方形1基の他、楕円形を呈するものがある。埋土中から、多量の炭とともに弥生時代中期末の土器が出土した。この土壇を切って幅50cm、深さ5cm程の溝を検出したが、遺物は出土しなかった。柱穴は径50cm程の円形を呈し、中期末の弥生土器が出土した。

この周辺の調査では、竪穴住居を多数検出しているが、今回の調査区では1棟もみつからなかったことから、集落内部に空閑地のあったことが予想される。

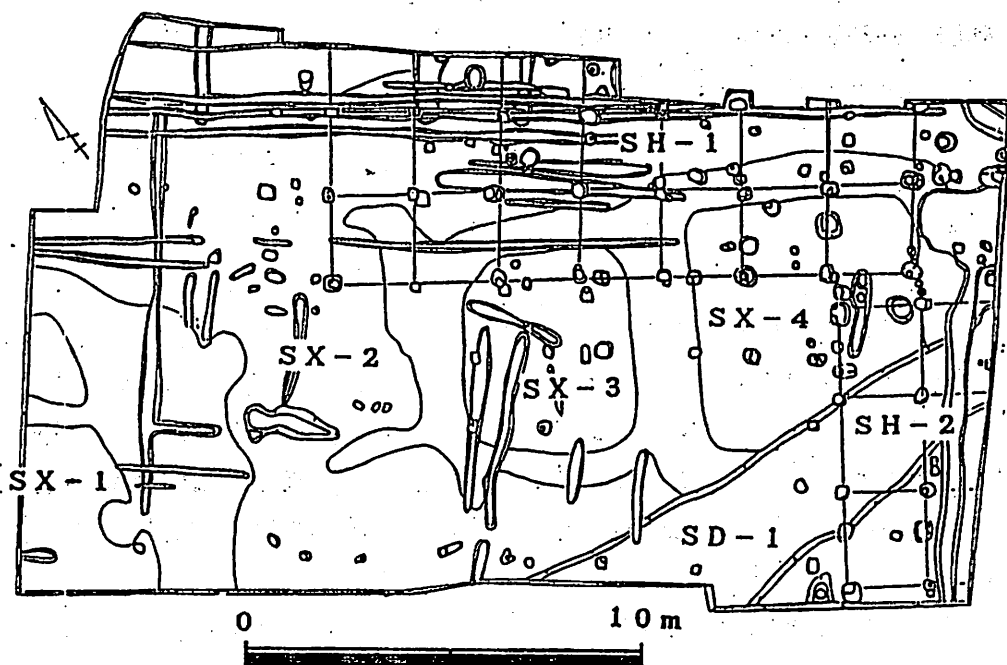


4 塚之越遺跡の調査

古高町の工業団地、日本マタイ株式会社工場の北東側に近接する水田地で、個人住宅建設に先立ち、発掘調査を実施した。調査面積は約400㎡で、11月9日に開始し、12月6日に終了した。

耕土、床土直下(-25cm)の明黄色シルトの地山で、遺構の検出を行った。その結果、平安時代末頃の掘立柱建物、奈良時代の溝、弥生時代の方形周溝墓など、各時代の遺構を検出した。掘立柱建物はSH-1が7間×2間以上の大規模な建物で、SH-2は3間×1間以上の規模になる。建物の柱穴は1辺30~60cmを測る方形で、深さ80cm以上掘られたものもある。その中から、柱を固定するための20cm大の石が出土した他、平安時代末頃の土師器や緑釉陶器などがみつかった。SD-1は東西方向にのびる溝で、SH-2に切られている。幅約3m、深さ30cmを測り、断面は浅い逆台形。溝底からは奈良時代の須恵器、土師器が少量出土した。SX-1~5は弥生時代の方形周溝墓である。SX-1、2はその一部を検出したのにすぎないが、3~5は全体が分かる。SX-1の周溝は最大幅が約4m、深さ80cmを測る。SX-3~5は溝の1辺を共有し、連結している。SX-1に比べ、やや小型の周溝墓で、長方形の台状部を有している。周溝内からは弥生時代後期末頃の広口壺、長頸壺、受口状口縁甕などの土器が出土した。

以上の様に、各時代の遺構が重複する密度の高い遺跡であることが分かった。



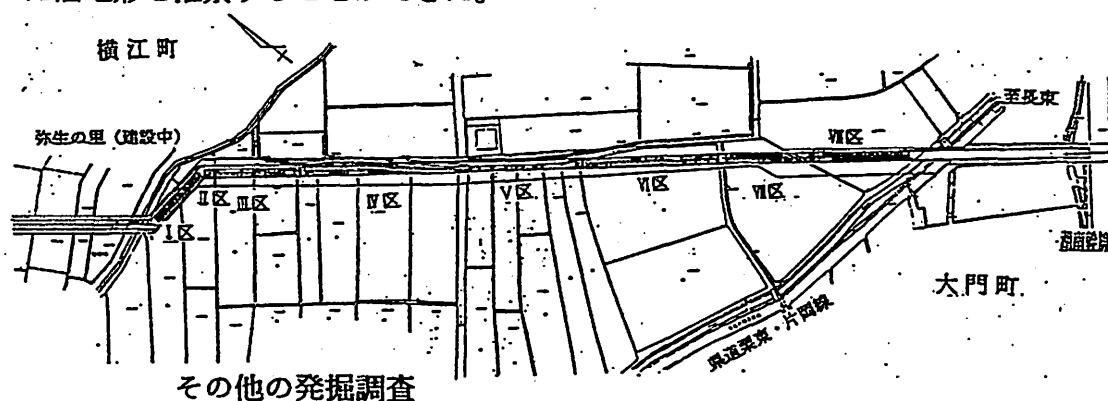
5 横江遺跡の調査

横江町地先で、昨年11月14日から12月8日まで雨水幹線排水路工に伴う横江遺跡の発掘調査を実施した。現在建設中の「弥生の里」から南東方向の県道栗東・片岡線までの約300mの区間で、幅約5m、面積約1500㎡を対象にした。

下図のとおり、対象地に設けた8調査区に分けたうち、Ⅰ～Ⅲ区からは古墳時代の土器を出土する旧河道がみつかった。全容は把握できなかったが、「弥生の里」造成工事に先立って実施された調査（S58～62、県教育委員会）でも、この旧河道が検出されていて、相当な規模を有することがわかった。Ⅳ区より南東には遺構の存在はなく、地表下約1mの深さには自然遺物（植物茎根）の入った黒色粘質土層が広汎に堆積していた。

みつかった旧河道は、現在は小河川に衰退している堺川がかつて野洲川主流だった頃の支流の一つで、当地域はこのような支流が幾条も網目状に流れる低湿地帯を形成していたと考えられる。中世以前、この低湿地帯の南端は、古高古墳群、下長遺跡が所在する古高町地先にまで及んでいたであろう。古高古墳群は言うまでもなく、下長遺跡にしたところで人々が起居した生活跡は今のところみつかっておらず、祭祀にかかわる遺跡だと考えられている。集落跡としては、横江遺跡、欲賀南遺跡などの様に反対方向の当地北西側の微高地に占地している。中世以降堺川の急速な衰退化、そしてそれに相関する土地の安定化が進むことによって、当地域にも集落が形成されるようになる。

今回の調査は、旧河道の検出と若干の出土にとどまったが、今は失われてしまった旧地形を推察することができた。



その他の発掘調査

番号	調査遺跡名	所在地	調査期間 (予定)	主な調査成果
6	二町鏡遺跡	二町町字鏡	12月12日～(88) 3月31日	鎌倉・古墳時代の溝
7	伊勢遺跡	伊勢町字伊勢里	12月19日～12月23日	土壇・溝
8	〃	〃 字大苗代	12月19日～(88) 1月10日	弥生時代の方形周溝墓



秋季特別展終る

去る11月3日から27日までの期間開催した秋季特別展「古墳と埴輪」には多数の見学者がありました。守山で発見された古墳と埴輪との関係や古墳が造られた時の様子を理解していただくために開催したものです。今回展示した近江町狐塚古墳出土の家型埴輪は、精密に作られていて古墳時代の住居の様子がよく分かりました。貴重な資料をお貸しくださった近江町教育委員会にお礼申し上げます。

講演会「古墳とまつり」

11月13日には、奈良四条古墳の発掘調査成果を中心に講演会を開催しました。調査を担当された西藤清秀氏の話に耳を傾ける熱心な考古学ファンで、当センター会議室は満員になりました。



体験学習「古代の火おこしに挑戦」

特別展期間中の土、日曜と祝日に火おこしの体験学習を開催しました。なかには30分以上もかかって火を付けることができた小学生など約80名の参加者のうち、9割以上が成功し、祖先の生活の知恵を体験しました。



【後記】 新春とはいえ、厳しい寒さはこれからです。古代の人は、どのようにこの長く寒い冬を過ごしていたのでしょうか。ちょっと想像してみることにしました。採光の悪い、しかし保温性の良い竪穴住居の中、中央に設けられた炉を車座に囲んで、暖をとっていたのでしょうか？意外に暖かったかもしれませんね。父や母は来るべき春に備え、稲作や狩猟の準備に精を出し、子供は子供で、自然の中での遊びにあれこれ思いをめぐらせ、やがて訪れる春を心待ちにしていたのでしょうか。長い冬には有り余る会話の時間がありました。親は子に、家族の一員として、村の一員として何をすべきかを語り、また自然の中で生きて行くあらゆる知識を与えます。

現代人に比べ、親子の語らいの時間ははるかに多かったのではないのでしょうか。